

考古学

◇教員◇

教授 福田正宏
准教授 根岸洋、森先一貴
助教 柴原聡一郎

◇学生◇

学部 20名 修士課程 6名 博士課程 9名

(1) 考古学とは

考古学は、遺跡や遺構、遺物の研究によって人類の歴史を明らかにする学問です。文献をつうじて歴史を明らかにする文献史学とともに、歴史学の一翼を担っています。文字のない時代や地域の研究は、考古学の独壇場といえます。では、文字のある時代は考古学の守備範囲でないかといえば、そうではありません。たとえば、古代国家の中枢であった藤原宮跡や平城宮跡から発掘された多量の木簡は、編纂された文献史料からは知り得ない生々しい都の様子を明らかにしました。東京大学本郷キャンパス構内でも江戸時代の加賀藩上屋敷に関連する遺構群が明らかになり、考古資料・文献史料の双方から近世大名屋敷のあり様を具体的に知ることに成功しています。エジプトのピラミッドもヒエログリフという文字の時代ですが、考古学の研究対象でもあります。

ここから分かるように、考古学が文献史学と大きく異なる点とは「発掘調査」です。フィールドにおいて発掘調査を通じて遺構や遺物といった研究資料を獲得し、分析することこそ、考古学の学問的な固有性があるのです。

考古学が扱う分野は多岐にわたっています。遺跡周辺の古環境と人の関係（環境考古学）、動物と人の関係（動物考古学）、儀礼や祭祀の意味や機能（祭祀考古学）など、対象に由来しその名を冠した分野が多く、民族誌や伝統的生活を送る社会に分け入って考古事象と比較研究する民族考古学もあります。また、遺跡や遺物の年代決定には考古学独自の方法に加え、数値年代を得るための放射性炭素年代測定など自然科学的方法があります。このほか、古人骨などのDNA分析にもとづく人類拡散の歴史や人間社会の親族組織の研究の進展はめざましく、炭素・窒素同位体比分析から過去の人々の食性パターンを評価する考古化学的研究もあります。今日ではこれらの学問分野との連携が必須となっており、考古学は文系の

学間にとどまらない学際的な文理融合の学という側面をもちます。

考古学の裾野がかくも広いのは、考古学が過去の人類活動全般を対象としているからです。私たちを含む人類は、数百万年という長い時間をかけて世界中に拡散し、各地で生物、環境、気候との関係のなかで、多彩な文化、文明を築きあげてきました。いま考古学は、遺跡を結節点として様々な分野を統合する基盤を提供し、人類が歩んできた歴史の深層にせまる中心的役割を担っているとと言えます。

(2) 何を学ぶのか

必修科目 考古学専修課程の必修科目（括弧内は単位数）は、史学概論（2）、考古学概論（4）、考古学特殊講義（16）、考古学演習（6）、野外考古学（4）、卒業論文（12）です。

発掘調査 考古学独自の方法である発掘調査を学ぶ科目が、「野外考古学Ⅰ・Ⅱ」です。発掘は遺跡の掘削をおこなう以上、ある種の破壊をともしません。だからこそ遺跡の発掘には慎重に当たらなくてはなりませんし、発掘の過程で得られた成果を厳密に記録する必要があります。

また、発掘調査に際しては遺跡の位置や地形を正確に把握するとともに、検出遺構や出土遺物を正確に記録するための測量が必要ですから、測量の原理や測量機器の使用に慣れる必要があります。発掘調査を進めるにあたって、もちろん闇雲に掘ればよいわけではありません。周辺の地質条件を把握し、遺構や遺物が包含される地層の堆積を精査しながら、慎重に掘り下げます。その間、図面や写真、三次元情報などの記録も進めます。調査後はそうした記録を整理し、出土した遺物の水洗いや台帳作成を済ませ、接合して実測図や写真、拓本をとり、必要な場合には三次元計測をします。これらの調査研究成果を総括した発掘調査報告書を刊行するという流れを経て、発掘調査は終了します。発掘調査によって得られる記録の全てが、人類の過去を調べるための大切なデータとなるのです。

野外考古学Ⅰは、野外調査の基礎的技術を本郷キャンパス内で学びます。その後履修する野外考古学Ⅱは、北海道北見市常呂町のサロマ湖畔にある人文社会系研究科附属「北海文化研究常呂実習施設」で実施されます。この実習では教員と大学院生、学生が宿舎に滞在し、本物の遺跡で発掘調査や整理作業を（ほとんどの学生は）はじめて経験します。机上の学習だけでは知り得ないフィールド調査の楽しさや調査技術の奥深さにふれる機会にもなり、打ち解けた雰囲気ですぐ立ちの垣根を取り払って日頃抱いている疑問をぶつける機会もあるでしょう。なお、学生諸君が慣れない環境でも日々の生活を快適にすごせるよう、宿舎には各種設備が整えられています。日本の大学のなかでは他に類をみない恵まれた環境で発掘実習に参加することができますので、安心して楽しく学んでほしいと思います。

研究方法 さて、発掘調査した遺構や遺物が、そのまま歴史を語ってくれるわけではありません。考古学の方法論によって整然と分類、分析されて学術的な意味での歴史資料になります。なかでも最も基礎となる型式学は、モノ遺構や遺物がもつ年代的、地域的特徴を捉えてその変化や関係を明らかにするものです。それとともに、遺跡の堆積プロセスを理解しながら遺跡形成過程を明らかにし、型式の組み合わせやその新旧関係を説明することも大切な手続きです。こうした基礎的な理解のうえにたつて、今は主人をうしなつたモノから過去の人間行動を読み解くことに考古学の醍醐味があります。しかし、「この遺物は何につかわれたのだろうか？」と悩むだけでは、過去の行動は見えてきません。今は見るができない「行動とモノの関係」を知る鍵となるのが、さきにも触れた民族考古学や、具体的な復元実験にもとづく実験考古学なのです。遺物や遺構の背後にある使用と結果の因果関係をモデル化することで、過去を解釈していくことが可能になります。歴史時代では文献・絵画史料が同種の役割を果たしています。このほか、地質学・堆積学・古生態学・古生物学などの諸分野と連携して実施される古環境の理解も不可欠です。もちろんこれで万全というわけではありませんが、できる限り多くの正確な証拠から、現在もつとも蓋然性が高いといえる人類史を構築しようとするのが現代の考古学の目標なのです。

講義・演習 「考古学特殊講義」では、こうした考古学の方法論を中心にさまざまなテーマについて講義形式で、「考古学演習」ではすぐれた内外の文献にもとづいて方法論およびその具体的な実践方法を演習形式で学びます。守備範囲の広い考古学のあらゆる理論と方法論をすべて教えることは不可能ですが、書籍などを通じて基礎的な知識を一通り身につけてもらえるように工夫しています。専任教員だけではカバーできない専門的な知識についても、学内外から専門家を非常勤講師としてお招きして、幅広い分野を学ぶことができる場を提供しています。

卒業論文 学部3年生までに基礎を身につけたあと、4年生には卒業論文という初めての大きな仕事がまっています。学生自身が選んだテーマを深く研究して論文にします。研究史をよく調べ、課題・疑問を見つけて論文の目的を設定し、課題解決に必要な資料の収集と分析方法をさだめ、分析結果に基づく考察を加えて結論を導くという作業は時間がかかり、大変です。それでもこの作業は四年間の学業の集大成です。今まで身につけた知識、論理的思考法、それらを総動員した努力の結晶として、必ず今後の人生の財産になります。研究職を希望するにせよ就職を希望するにせよ、この経験はとくに大切にしてほしいと思います。

大学外での学び 大学の外にも考古学を学ぶ場があります。考古学研究室の教員は全員フィールド調査を行っており、大学院生を中心に希望者が参加しています。海外を含め、各地で行われている発掘調査に、教員や先輩の紹介で参加する人も

います。他大学や博物館、あるいは埋蔵文化財センターなどで有志が集まり特定のテーマで開かれるシンポジウムやワークショップに出かけ、現在学界でどのようなことが議論されているのかを自分で把握することも大切です。各地の博物館や資料館で、それまでに学んで関心を持った遺物を実際に見学して、これまでになかった新たな研究を模索することも有意義でしょう。考古学はフィールドと実物の学です。実際の遺跡や遺物がいかに雄弁であるかを実感してください。

(3) 教員の紹介

福田正宏 教授は、シベリア・ロシア極東・日本列島における土器出現期以降の先史文化全般について、環境への適応という視点から復元を試みています。広く東北アジア史のなかで日本列島の先史を捉える視点を重視しています。

根岸洋 准教授は、縄文時代から弥生時代への移行を専門分野とし、その過程を人類史の中に位置付ける研究を志向しています。また、先史時代の文化・社会の解釈に役立てるため、民族考古学的研究にも取り組んでいます。

森先一貴 准教授は、東アジアの旧石器時代を専門として、国内各地とモンゴルでフィールド調査を行ない、人類がユーラシアから日本列島に進出した過程を研究しています。先史考古学への水中考古学的手法の導入にも取り組んでいます。

柴原聡一郎 助教は古墳時代の考古学を専門とし、古墳の三次元測量を主な手法として、設計・築造技術の解明に取り組んでいます。

このほか、当専修課程の専任教員以外にも、北海道北見市常呂町にある**常呂実習施設**で発掘実習（「野外考古学Ⅱ」）を指導する熊木俊朗教授は、北海道をおもなフィールドとしつつも周辺の北方古代文化を視野に入れ、アイヌ文化の成立過程を追究しています。

総合研究博物館には西アジアの先史考古学を専門とする門脇誠二教授、年代測定や同位体分析を専門とする考古化学の米田穰教授、人類化石の形態分析からアジアの人類史を研究する人類進化学の海部陽介教授がいます。学内には大学施設の新設等に伴う事前の発掘調査を担当する**埋蔵文化財調査室**がありますが、この調査室には先史時代から江戸時代まで埋蔵文化財調査に精通した尾田識好准教授が所属し、「野外考古学Ⅰ」を通して野外調査に必要な技術の手ほどきをしてくれます。また、このような方々は卒業論文などの相談にものってくれます。

(4) 進学を希望する諸君へ

考古学は広義の歴史学の一分野ですから、歴史関係の講義はできるだけ受講しておいてほしいと思います。とくに歴史時代の考古学を専攻するためには、文献史学の素養を身につけておく必要があります。先史考古学では人類学や生態学の

知識が必要です。外国考古学を志す学生は、外国語がすべての基礎になりますので、とくにその習得に努めてください。もちろん、日本考古学を目指す場合も、方法論を学ぶために外国語文献講読を進めることは必須です。

考古学に進学しようとする学生は、駒場Aセメスターに、必修科目となっている「**考古学概論 I**」、「**史学概論**」の授業を必ずとるように注意してください。「考古学概論 I」は本郷で開講されていますが、「史学概論」は駒場で開講されますので、未履修の場合は本郷進学後も駒場に通う必要があります。同じく駒場Aセメスターに開講される「**人類学概説**」も、必修科目ではありませんが考古学研究の基礎として重要なので、進学予定者にはできるだけ受講することを勧めます。

(5) 卒業後の進路

考古学専修課程のカリキュラムは、考古学研究の専門家を養成することを目的として組み立てられています。過去に生きた人間の学を通じて人間社会や文化のあり方について理解を深めること、また考古学特有の論理や思考法を駆使して卒業論文を計画し、文章を練り上げていくプロセス、そして座学のみでは得られない常呂での活動やチームワークが求められる発掘調査の経験は、考古学に関わる仕事を選択した場合はもちろんのこと、考古学と直接関わらない進路を選んだとしても、必ず糧になるはずで

学生は卒業後、引き続き研究を続けようとする場合は大学院を目指し、そうでない場合は一般就職することになるでしょう。進学と就職についての近年の比率は1対3ほどです。就職先は、官公庁、銀行、商社、運輸、製造、情報、マスコミ関係、国連専門機関などと幅広いことが特徴です。

修士課程進学者は、修了後一般就職する場合もあるわけですが、その多くは博士課程に進学し、研究を続けるために大学や博物館、研究機関への就職をめざすこととなります。もちろん研究職への就職が容易でないことは考古学も例外ではありません。ただし、考古学の場合は都道府県や市町村など地方公共団体にある埋蔵文化財保護部局が、専門を活かせる就職口を全国各地で提供しています。この場合は、学部卒ないしは修士課程修了の段階でも就職することができます。

考古学研究室では独自のホームページ (<https://www.l.u-tokyo.ac.jp/archaeology/>) を開設していますので、ぜひ参考にしてください。また、研究室を訪問して先輩たちの話を聞くことも実情を知るうえでは良い方法かもしれません。法文2号館の地下にある学生室も、一度訪ねてみてはいかがでしょうか。